



芝山小だより

2月号

清瀬市立芝山小学校

校長 清水 一臣

<http://www.kiyose.ed.jp/>

道徳の授業を通して思うこと

副校長 中島 孝

先日、低学年のある学級で道徳の授業を参観しました。学習する道徳の内容項目は、「正直・誠実」です。学習の目標は「うそをついたりごまかしたりしないで、明るいい心で生活しようとする心情を育てる。」ことでした。

先生が、「正直」という言葉について子供たちに問いかけました。子供たちの中には「正直」という言葉について知らないと答える子もいました。そこで、正直でいる気持ちを問いかけると、「やさしいきもち。」「すっきりしたきもち。」という答えが返ってきました。

表現の仕方は人それぞれですが、子供たちは、「正直なことはよいことだ。」ということを知識として知っているということです。これは、6～8歳の子供であっても、家庭や学校生活の中で教えられ、学んできた経験の積み重ねの結果ではないでしょうか。ところが、子供は「うそ」をつきます。大人から怒られることへの防衛反応でしょうか。これも子供が生活経験の中から学んできたことです。

道徳の授業では、物語の主人公が「うそ」を隠すために、「うそ」を重ねていきます。その主人公の気持ちを子供たちは考えるのですが、多くの子供たちが主人公と同じような場面を経験しているからこそ主人公に共感して考えることができている。そしてその時のドキドキ感や正直に言えた解放感などを思い出して、「やっぱりうそは嫌な気持ちになる。」「正直に言えたことですっきりした気持ちになれた。」など「正直」であることの良さを再確認しています。

つまり、道徳の時間の良さは、今までの自分を振り返り、これからの生き方を見つめることができることです。

この学級の子供たちは授業のまとめで、今まで自分がついてしまった「うそ」や「正直に言えたこと」をワークシートに書いていました。心の中では、ずっと「うそ」はつきたくない。「正直に言いたい。」と思っていたことでしょう。でも、またすぐに「うそ」をついてしまうかもしれません。

子供たちは、正しいことができたり、できなかつたりすることを繰り返して大人になっていきます。大人になれば、「嘘も方便」ということもわかってきます。人として「やってはいけないこと」を正しく周りの大人が教えてあげなければ子供たちの道徳心は育ちません。また、大人も子供に教えながら人としての生き方を再確認しているのではないのでしょうか。

